

日本学術振興会 研究拠点形成事業（A. 先端拠点形成型）

中間評価（令和2（2020）年度採択課題）結果

日本側拠点機関名 京都大学大学院生命科学研究科（教授・原田 浩）

研究交流課題名 生体内の複雑系を対象とする統合放射線科学の国際研究拠点の形成

評価結果（総合的評価）

- | | |
|---|--|
| ○ | S 想定以上の成果をあげつつあり、当初の目標の達成が大いに期待できる。 |
| ○ | A 想定どおりの成果をあげつつあり、現行の努力を継続することによって目標の達成が概ね期待できる。 |
| | B ある程度の成果をあげつつあるが、目標達成のためには一層の努力が必要である。 |
| | C 成果が十分にあるとは言えず、目標の達成が期待できないため、経費の減額または中止が適当であると判断される。 |

所見

本事業による共著論文や国際会議での共同発表等の成果は現状十分ではないが、相手機関とも対等に近い費用分担を行い、国際研究交流拠点として継続的な活動が期待できる。また、進捗状況報告書に記載された、学術的価値の高い成果が得られたこと及び診断ガイドラインの改訂への活用など一部が実社会に還元・活用されつつあることは評価できるものの、本事業との関係が必ずしも明らかでない成果も含まれている事から、本事業に関わった具体的成果について説明があると良かった。

若手研究者の人材育成については、留学促進セミナー「留学のすすめ」や、留学生の受け入れを希望するPrinciple Investigatorと留学希望者のマッチングを図る「Meet the Professor」などが実施されている。コロナ禍で往来が難しい状況にもかかわらず、オンラインでの複数の独創的な企画を考案し、その結果国内外双方から複数名の長期留学者が生まれたことは評価でき、今後も若手を中心としたネットワークの構築及び発展が期待できる。

本事業終了後の活動継続に向けたCORE Programの設立は高く評価されるものであり、低線量・低線量率放射線応答機構の解明に資する成果創出が期待される。また、今後は、統合放射線科学の観点から、防護や物理、化学等を含むより広い分野の研究者が参加可能な企画にも期待したい。